

日本放射線腫瘍学会 第28回学術大会 印象記

野中 穂高
Nonaka Hotaka

平成27年11月19～21日に群馬県ベイシア文化ホール・前橋商工会議所会館にて中野隆史大会長（群馬大学大学院腫瘍放射線学 教授）のもと日本放射線腫瘍学会（JASTRO）第28回学術大会が開催された。

今大会は放射線治療の物理工学的革新と生物学的革新の融合に焦点を当て、低侵襲の放射線がん治療法の開発、先進的がん診断法による正確な病状の把握、最適なオーダーメイド放射線治療をめざし、メインテーマは“高精度放射線治療時代の包括的放射線腫瘍学：Comprehensive Radiation Oncology in High-Precision Radiotherapy Era”とされた。また今大会では米国放射線腫瘍学会（ASTRO）、欧州放射線腫瘍学会（ESTRO）、韓国放射線腫瘍学会（KOSRO）、中国放射線腫瘍学会（CSRO）、アジア放射線腫瘍学連合（FARO）、国際原子力機関（IAEA）等との連携により国際的なプログラムが非常に充実した内容となった。学会の国際化に沿って学術発表の抄録が原則英語とされたが、予定を上回る550題を越える演題の申し込みがあった。

いずれの発表、シンポジウム、講演、ワークショップも非常に充実した内容であったが、その中で筆者自身が聴講し特に印象に残ったプログラム等を紹介させていただく。会長講演「放射線腫瘍学の温故知新と放射線腫瘍医養成 そして国際展開へ」では中野先生より子宮頸癌、粒子線治療を中心に放射線腫瘍学の歴史や今後の展望についての講演があった。35年に渡る群馬大学・放射線医学研究所での治療経験の紹介だったが、中野先生の放射線治療に対する並々ならぬ熱い思いを感じた。シンポジウム「癌に対する過剰治療予防、癌待機療法、縮小放射線療法、そして癌治療の限界」では西尾正道先生のご講



写真1 会場

演が印象的であった。「放射線治療とは局所治療であることを忘れてはいけない」、「たとえ骨転移に対する照射であっても患者一人一人に対してオーダーメイド化した治療をするべきである」と講演された。筆者自身は骨転移に対する照射では、Performance Status、予後、組織型、部位、照射範囲等で線量、回数を調整しているが、西尾先生の講演を聞いて根治的照射、緩和的照射のいずれにおいても、さらなる個別化・オーダーメイド化の検討の必要性を感じた。

第2日目の夜にはJASTRO会員と群馬大学の学生から構成されたJASTROオーケストラによる演奏会が開催された。チャイコフスキー作曲の「くるみ割り人形」「白鳥の湖」が演奏された。筆者はオーケストラを生演奏で聞いたことはほとんどなかったが、非常に迫力があり、どの楽器もとてもきれいな音色であった。日々多忙な診療を行っているにも関わらず、このような素晴らしい演奏をされた先生方の多彩な才能に驚嘆するばかりであった。筆者自身



写真2 JASTRO オーケストラ



写真3 ご当地グルメ

のポスター発表（演題名：Acute toxicity after hypofractionated intensity modulated radiotherapy for localized prostate cancer）の前立腺セッションは9時10分からの開始にもかかわらず、多数の方にフロアに来ていただいた。このセッションは演者と聴き手との距離が非常に近いため両者の垣根が低く、フロアとの一体感を感じられたが、筆者の発表に対してはフロアからの質問がなく、少々寂しい思いをした。ここで発表内容を簡単に紹介させていただく。筆者の前所属である山梨大学放射線科では前立腺癌に対する寡分割IMRT（3.1 Gy×20回）を臨床試験として行っているが、同施設で寡分割IMRTを施行した29例の急性期有害事象に対する検討を行った。結果はGrade3以上の重篤な尿路系、消化器系有害事象は認められなかった。またGrade2以上の急性期有害事象の発生頻度は同施設の標準分割IMRT（2 Gy×38回）や他施設の寡分割IMRTのデータと比較しても同等であり、前立腺癌寡分割IMRTの急性期有害事象は十分に許容できるという結論に至った。

今大会では懇親会や屋台等で群馬県の名物を味合



写真4 ぐんまちゃん

うことができたが、どれもおいしいものばかりであった。また群馬県のマスコットキャラクター“ぐんまちゃん”も会場に駆けつけ、ご当地の雰囲気をも十分に感じることができた。

最後になるが学会印象記の執筆の機会を与えてくださったIsotope News編集委員会の方々に心から感謝したい。

（富士吉田市立病院放射線治療科）